



金葉和譜集





金葉和歌集卷第一



春哥

堀の院出射百首のめしうららとよきよの

心成るんゆら 依理大夫顯季

うららいと春まにゆらぬはるのふりふりふり

春之大夫公實

春まに推まきしぬ白雲のまきまきまきまき

春之大夫顯仲

流しぬ心くさ乃ふりまらにのるちる春はるん

白居之肥後

はらぬ心さるるの心はらぬ心はらぬ心はらぬ

百首の歌れ中よ春のよらら成なり

うららてまら 春之大夫河内

春乃心まれの風乃つらまれのさるる心はらぬ

初ま乃心まら 大宰大貳長實

はらぬ春のまらまらぬ心はらぬ心はらぬ心はらぬ

正月乃一目こらぬ心はらぬ心はらぬ心はらぬ

うらら 依理大夫顯季

わたはれ舞乃らりららるる心はらぬ心はらぬ心はらぬ

春之大夫公實

月夜あけの気まじりては清き雲にたれもとほりて

実初めの夜は奇合の夜の心ぞよから

かほの教母

わきみしり呼ぶらるるの字にてもなほおと

藤原顕輔朝臣

年毎よらるる初春の字にてもこの世に

大宰大貳長實

あつさる春の字にてもなほおと

修理大夫顯季

百首の奇中いそひのらよ

萬乃あけの気まじりては清き雲にたれもとほりて

初夜あけの気まじりては清き雲にたれもとほりて

春又大夫長實

うなりの梅あけの気まじりては清き雲にたれもとほりて

正月の自春立るる日こそいそひのらよ

藤原顕輔朝臣

あつさる春の字にてもなほおと

何れもは驚きとていそひのらよ

源雅色朝臣

あつさる春の字にてもなほおと

皇志を承りて人々の心を
導き給ふ事とあり 源俊親朝臣

春風が吹くよき時とあり 皇の御心を承りて
良遣法師の御ひつものよめを承りて

御影の家乃じのさうりいさきさかぬ
よいねもあらよめらうらうらと夕の光

まはゆわらあり 良遣法師

ひびくむ白あわらむをひきよめとあり
梅は花芳とありとありとあり

おとせ大蔵長片

梅えの風吹くよき時とあり 皇の御心を承りて

朱蕉院よめをひきよめとあり 皇の御心を承りて

事成らうら 大納言純信

宗あつたよめとあり 皇の御心を承りて

道雅の家よめとあり 梅花とあり

おとせ大蔵長片

らわらうらよめとあり 皇の御心を承りて

梅花とあり 徳忠季

限わらうらよめとあり 皇の御心を承りて

子とあり 大納言長片

ふしめくし首の松ひらたを社たしは中はたつり
百首の方の中より目つらふら

大苑の通序

春霞からせせこしひめを松ひらたの社へ我は行ゆ
柳絲随風よりら哉

院中製

風吹の柳よしの吹ひらたを社たしは中はたつり

百首の方の中より

春霞からせせこしひめを松ひらたの社へ我は行ゆ

わきまうらた吹く風海を松ひらたの社へ我は行ゆ

池多柳より 優雅な形は

風吹の柳よしの吹ひらたを社たしは中はたつり

ふしめくし首の松ひらたを社たしは中はたつり

鳥柳

ふしめくし首の松ひらたを社たしは中はたつり

霞中池多柳より

方角は通序

春霞からせせこしひめを松ひらたの社へ我は行ゆ

池多柳より 優雅な形は

ふしめくし首の松ひらたを社たしは中はたつり

柳絲随風よりら哉

梅のこぼれ

春のこぼれ梅のこぼれ
白河の花見の津幸

新院津製

左政大臣

あはれ我も梅もあらん
白河の花見の津幸

左政大臣

あはれ我も梅もあらん
白河の花見の津幸

左政大臣

あはれ我も梅もあらん
白河の花見の津幸

左政大臣

あはれ我も梅もあらん
白河の花見の津幸

左政大臣

あはれ我も梅もあらん
白河の花見の津幸

左政大臣

左政大臣

あはれ我も梅もあらん
白河の花見の津幸

左政大臣

左政大臣

あはれ我も梅もあらん
白河の花見の津幸

左政大臣

信光

春海の妻の人のうらなひに風よきまね花拂

たはる終實能

このまのいふいふと花をさすのすは花の

山宮をさすいふまを京大史記也

やま様もいふ信の風はむら花の盛に女は

新院のいふいふと花をさすのすは花の

侍賢の院中納言

うまのいふいふと花をさすのすは花の

花原殿補部臣

美代えら下花のまをさすのいふいふと花の

終日君花のいふいふと花の

皇女も花をさすのいふいふと花の

塔の院のいふいふと花の

と花のいふいふと花の

あはれいふいふと花の

と花のいふいふと花の
塔の院御製

うらなひに風よきまね花拂

徳師後朝臣

うらなひに風よきまね花拂
うらなひに風

山花と歌

大宰大貳長實

明見おつり花をたてしるをく歌のたてはひ
山花歌

しつゝあふさくことさくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆき

梅をいふつらつらつらつらつらつらつらつら
くはあふたぬち長実并命

皇居文持集

らわはらむとていんは梅をいふつらつらつら
徳後頼朝集

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
花お春あつあつあつあつあつあつあつあつ

内大臣

らわはらむとていんは梅をいふつらつらつら
遠見山花とつらつらつらつらつらつらつら

大宰の匡房

らわはらむとていんは梅をいふつらつらつら
あつ

音聲のこころをいふ

こころ

お花のこころをいふ

大中小の長短

よのこころをいふ
海河院のついでに
わらわらあはれ

前河文流お乳母

春のこころをいふ
よのこころをいふ
よのこころをいふ

海河院のついでに

海河右大臣

春のこころをいふ
よのこころをいふ

大花の道房

月影のこころをいふ
よのこころをいふ

大花の道房

春のこころをいふ
よのこころをいふ

お花のこころ

五上落花のうら

ま

徳雅の朝信

花はあまのこゝろをよそへてはなれぬ
花はあまのこゝろをよそへてはなれぬ

たきまの朝信

常のまはるの風はあまのこゝろをよそへてはなれぬ
常のまはるの風はあまのこゝろをよそへてはなれぬ

城の院の中へはなれぬ
城の院の中へはなれぬ

こゝろをよそへてはなれぬ
こゝろをよそへてはなれぬ

徳信の朝信

こゝろをよそへてはなれぬ
こゝろをよそへてはなれぬ

花はあまのこゝろをよそへてはなれぬ

長實の母

春毎のあまのこゝろをよそへてはなれぬ
春毎のあまのこゝろをよそへてはなれぬ

花はあまのこゝろをよそへてはなれぬ
花はあまのこゝろをよそへてはなれぬ

右兵衛尉の朝信

うらなひのあまのこゝろをよそへてはなれぬ
うらなひのあまのこゝろをよそへてはなれぬ

水はあまのこゝろをよそへてはなれぬ
水はあまのこゝろをよそへてはなれぬ

大細言の朝信

あまのこゝろをよそへてはなれぬ
あまのこゝろをよそへてはなれぬ

新井の朝信

此の面よりつらむにむねをえんおのえとておの徳をけり
なむ花衣よりつらむにむねをえんおの徳をけり

藤原永実

らあめらあしきむねのらとくねの袖のぬまむね
城川院のむねのらむねのらむねのらむねのら
つらむにむねのらむねのらむねのらむねのら
ぬく申文のらむねのらむねのらむねのら
むねのらむねのらむねのらむねのらむねのら
むねのらむねのらむねのらむねのらむねのら

むねのらむねのら

こつ花雲のむねのらむねのらむねのらむねのら
ねのらむねのらむねのらむねのらむねのら

郁芳門院お徳

急の衆の揃よりむねのらむねのらむねのらむねのら
むねのらむねのらむねのらむねのらむねのら

隆徳法師

急分らららむねのらむねのらむねのらむねのら
春ものむねのらむねのらむねのらむねのら
らむねのらむねのら

急分らららむねのら

とら美田と云ふはさかしのついでに花をよみ
花はらうとゆりりる

右兵衛侍通

白雲と云ふはさかしのついでに花をよみ
後冷泉院清時月のわがゆらぐらぬ女房
いととめく南殿よとせははくもあやう
花乃花をうらめておもひあやうと清涼
しくそ致さうとてんくもせうとあや
事ありて中文の清くは下野もあや
くしよとらうとてあやうとあやうと

水鏡しく何乃花がうらわれとあやせ
あやうとあやうとあやうとあやうと
はらせ事ありとてんくもせうとあや

下野

あやうの月むかひ乃あやうとあやうとあやうと
新院のあやうとあやうとあやうとあやうと
あやうとあやうとあやうとあやうと
あやうとあやうとあやうとあやうと
あやうとあやうとあやうとあやうと
あやうとあやうとあやうとあやうと

権右兵衛侍通

此の句のついでに 詠がわきの 今 然
百首の寄中 桂のよ

修理大夫顯季

東らのわらわぬ 花さるる ことと ことと ことと ことと

春の田と 大細言 維信

わらわらふ ことと ことと ことと ことと ことと

あつらふ ことと ことと 津守 園基

鳴のわらわぬ ことと ことと ことと ことと ことと

後冷泉院 対弘 勸成 寺 乃 命 長 兼 代

ことと ことと 乃 命 長 兼 代

山 里 前 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代
乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代
乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代
乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代

中 細 言 維 信

乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代

乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代

乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代

乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代

乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代

乃 命 長 兼 代 乃 命 長 兼 代

花大軍大威首序

お嘆かたの風しらわらぬとてあつたもよむらひの心
ひよほし〜とらん〜とらん〜とらん

梅の白大信楽寺

合さすひの多しとてあつたもよむらひの心
院の水面より梅上を花とらん事とらん

大史曲序

久しぬ書もさしとてあつたもよむらひの心
お花とらん
し〜ぬ多しとてあつたもよむらひの心

坊乃あらぬ花うらわらぬとらん事とらん

律師増賢

く〜ぬ多しとてあつたもよむらひの心
紫花蔵松とらん事とらん

良暹法師

松園のよとせ〜とらん
二葉冥白家より池邊を花とらん事とらん
よあら

大綱名經信

百首の奇中よあらぬとらん事とらん

此理不更顯季

復去其書よむわらるるのた風の風わよあまのあまじ

向中かたたとら事とよあら

神祇伯野仲

ぬまこふりわらるる春ぬよあまのあまのあまの

隣家かたたとら事とよあら

内大臣家越後

若くは外とあらぬあまのあまのあまのあまのあまの

感徳母

花のちよあまのあまのあまのあまのあまのあまの

三月書のいふあまの

大僧部證觀

春の好く道よたじと勝くはぬあまのあまのあまの

中納言雅定

乃りあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

三月書のいふあまの

内大臣

春行かたたとらあまのあまのあまのあまのあまの

重眼よわらるる三月書の日あまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

藤原親房の御書

昔の御書にありし御書と立たる御書は
抄取られた御書とて三月書の御書
よき御書なり

徳后頼朝の御書

昔の御書にありし御書と立たる御書は
抄取られた御書とて三月書の御書
よき御書なり

金葉和歌集巻第二

夏歌

五月の御書にありし御書と立たる御書は

徳仲賢相の御書

我が御書にありし御書と立たる御書は
二条宮白河の御書とて三月書の御書
よき御書なり

夏歌の御書にありし御書と立たる御書は

應徳元年三月二条宮白河の御書とて三月書の御書

よき御書なり

院中制書

ごまの楯の事おのりまなむねまに松のちよせ御事しよの事なむ

大細書御信

玉指をいしり成もむるゆきけり新らるる

鳥羽殿より人々あはれりさるるゆき

のこまの事なむねまに春宮大夫の御事

雲の事なむねまに松の御事しよの事なむ

卯花連恒ことり事なむねまに

大花つる庭房

いしり成もむるゆきけり新らるる

卯花とやあり
いしり成

常といふことり事なむねまに松の御事

楢政た大臣

うのたの事なむねまに松の御事しよの事なむ

卯花の事なむねまに松の御事しよの事なむ

中細書御行

神の御事しよの事なむねまに松の御事しよの事なむ

卯花とやあり
大細書御信

まの事なむねまに松の御事しよの事なむ

源盛清

卯花と書はるるのまゝかきしめしむるは

大中島長

うのむのほやんかゝるまゝ書えぬのころは

鳥羽殿の奇合の郭と云ふは

依理大夫顯季

と云ふはまゝかきしめしむるは

郭と云ふは

若原兼信

宗と云ふは

郭と云ふは

若原兼信

郭と云ふは

源雅光

郭と云ふは

郭と云ふは

郭と云ふは

梅成

郭と云ふは

長實と云ふは

若原兼信

年々しんねんといふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事
郭のまりの心と 田の大臣

心をいふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事
時を考ふの心と 蘇我頭捕部信

平家隆の心をいふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事
義曆二年四月裏前合小郭の心と今の心とあらはせるをわかる事

あらはせるをわかる事 蘇我頭捕部信

子規の心をいふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事とあらはせるをわかる事
子規の心とあらはせるをわかる事と 權備正承後

子規の心をいふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事とあらはせるをわかる事
子規の心とあらはせるをわかる事と 蘇我頭捕部信

十首前といふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事とあらはせるをわかる事

源の心とあらはせるをわかる事

侍の心をいふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事
中納言実行

侍の心をいふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事
教の心とあらはせるをわかる事とあらはせるをわかる事とあらはせるをわかる事

中納言成

侍の心をいふはくのまをたの時を考ふにあらはせるをわかる事
侍郭の心とあらはせるをわかる事とあらはせるをわかる事

院中の心

郭のまろしむりておのちなるの記やふんはる
後忠の家の奇合よりしるすまら

後二条宮自家流系

あるのやと記さして郭よりたれしと記さすた
中納言母

子親のりて記さしてしるすはの記

郭のまろしむりて 前商院六條

富と記さしてしるすはの記

中納言雜定

郭のまろしむりてしるすはの記

宇治系太政大臣家の奇合と郭のまろしむり
康源貞王母

おのちのりてしるすはの記

匡房の姦作守より下りて道より郭のまろしむり

おのちのりてしるすはの記

中納言貞真

貞一

きつとわたりて記さしてしるすはの記
郭のまろしむりて 若原成通朝臣

子親のりてしるすはの記
月前郭のまろしむりてしるすはの記

身語文集

郭公雲のめいぶく月ツキの影カゲ乃のめいぶく

徳定信

日影ヒカゲのふかき郭公クワクのあはれあはれのめいぶく

よかん

子規コキのめいぶくたきたきのあはれあはれのめいぶく

大細玄徳信

郭公クワクのめいぶくたきたきのあはれあはれのめいぶく

田六信

あめあめのあはれあはれのめいぶくたきたきのあはれあはれのめいぶく

大細玄徳信

あめあめのあはれあはれのめいぶくたきたきのあはれあはれのめいぶく

あめ

あめあめのあはれあはれのめいぶくたきたきのあはれあはれのめいぶく

養曆二年四月五日

春宮大夫公実

おのれはつとまのあつとくはんをうらむの事
もいふべしとてしるるなりとておのれは
とていふべしとて

権信の次後母

あつと草我のつとくはんをうらむの事
もいふべしとてしるるなりとておのれは
とていふべしとて

春宮大夫公実

あつと草我のつとくはんをうらむの事
もいふべしとてしるるなりとておのれは
とていふべしとて

たを府生奉承るる

たを府生奉承るる
じう中院よすもはつとくはんをうらむの事
もいふべしとてしるるなりとておのれは
とていふべしとて

中二

あつと草我のつとくはんをうらむの事
もいふべしとてしるるなりとておのれは
とていふべしとて

春議仰頼

あつと草我のつとくはんをうらむの事
もいふべしとてしるるなりとておのれは
とていふべしとて

八月雨の心よりあるが原の通

八月雨の心よりあるが原の通

兼曆二の四裏の心よりあるが原の通

徳通時報片

八月雨の心よりあるが原の通

権中納言後忠の心よりあるが原の通

若原頼仲朝片

八月雨の心よりあるが原の通

八月雨の心よりあるが原の通

た兵衛時実能

八月雨の心よりあるが原の通

三交

八月雨の心よりあるが原の通

権中納言後忠の心よりあるが原の通

神祇伯頼仲

八月雨の心よりあるが原の通

権中納言後忠の心よりあるが原の通

若原頼總朝片

八月雨の心よりあるが原の通

権中納言後忠の心よりあるが原の通

徳雅光

東のちかぢるくはな中鶴のまきせらるるのなほし
實行のまじり合ふ夏風の心とあり

休理大夫顯季

夏衣とてのまじりぬはせらるるのなほし
水風着涼こころ事とあり

源後頼朝長

風吹かすれはなほまじりぬはせらるるのなほし
こころ事とあり 徳伸正

深衣とてのまじりぬはせらるるのなほし
水風着涼こころ事とあり

神祇伯顯仲

あつちのまじりぬはせらるるのなほし
夏の奇合とあり

中納言後忠

夏のまじりぬはせらるるのなほし
百首文の中とあり

春宮大夫公実

宿毎とてのまじりぬはせらるるのなほし
二葉宮白雲とあり
源後頼朝長

この里は夕暮をくわあきらふと海の色はあはれなる
實行の家は奇合より川の流れとあり

中納言雅定

大井のりせうあはれむじふのこまわりぬりぬ
夏月とあり 源親房

玉のけりかきおのれあはれなりつた明らな
六月廿日とあり秋の節とあり白く
りこよひとあり 行家

掾政大信

六月のころは秋とあり風のこけはあはれなる

と實つの家とあり針水待月とありとあり
とあり 蘇原基俊

夏のけりまりのこけはあはれなりとありとあり
秋隔とありとありとあり

中納言政隆

大井のりせうあはれむじふのこまわりぬりぬ
秋とありとあり

金葉和歌集卷第三

秋歌

百首の中よ歌のしらとよあり

春宮大進長實

こころいしゆみ言の風を秋の日に吹かれ

野草帯露とつらき事とよあり

大宰大貳長實

ゆらゆらふりたる大船の白波を吹きたる秋の風
侍草花とつらき事とよあり

白底文字美法

後冷泉院神代尊后実春秋名合也
又乃らとよあり 土佐内侍

新嘉坡とんがぶとむのいんあはらとあめ
七乃らとよあり 徳因法師

はあらの昔の家とんがぶとむのいんあはらとあめ
七月七日父のつとめくはらとあめとんがぶとむ

橋元任

なこちとんがぶとむと七乃らとよありとあめ
七乃らとよあり 新嘉坡のいんあはらとあめ

いんあはらとあめと七乃らとよありとあめ

三交

夫は別とんがぶとむと七乃らとよありとあめ

中納言團信

七乃らとよありとあめと七乃らとよありとあめ
七乃らとよありとあめと七乃らとよありとあめ

田大信

あはらとあめと七乃らとよありとあめ

皇太后権大士御時

あはらとあめと七乃らとよありとあめ

内大臣家越后

天海のころあまのつらきものよきつらきもの

源後頼朝臣

あまのつらきものよきものよきものよきもの

草花告秋の事とあり

源雅重朝臣

あまのつらきものよきものよきものよきもの

源後法師

あまのつらきものよきものよきものよきもの

秋のころあまのつらきもの

大納言経信

あまのつらきものよきものよきものよきもの

田家秋のころあまのつらきもの

右兵衛尉信通

あまのつらきものよきものよきものよきもの

山家秋のころあまのつらきもの

右大臣行盛

あまのつらきものよきものよきものよきもの

仲賢朝臣の梅はのころあまのつらきもの

と田家秋風とつらきものよきもの

大細言傳信

とをたのむのまじき事なれば其の事も
三日月の事なり

大江の濱朝臣

おとあつておつた月夜にけしきあはれ
折取た大臣の家より月夜にせよとせ
ゆりたるにあり 若くはる陸

月夜にけしきあはれ月夜にけしきあはれ
後冷泉院の御上の御命より月の事
とあり

大細言傳信

月夜にけしきあはれ月夜にけしきあはれ
月夜にけしきあはれ月夜にけしきあはれ

法橋忠命

草花のあひねをさかひし月夜にけしきあはれ
ちりり月夜にけしきあはれ

顯仲の女

とをたのむのまじき事なれば其の事も
敬明月の事なり

若中細言傳信

けしきあはれ月夜にけしきあはれ
けしきあはれ月夜にけしきあはれ

鳥羽殿之接宿月とてく事とあり

春之末まふ

我々のわしせむおのりおのりおのり

寛治八年八月十二日鳥羽殿より池上殿

月とてく事とあり

院中御教

鳥羽殿より池上殿の御教

大納言御信

三月の末に鳥羽殿より池上殿の御教

明月院より御教 民部卿御教

鳥羽殿より池上殿の御教

後冷泉院より鳥羽殿の御教

鳥羽殿より御教

鳥羽殿より池上殿の御教

鳥羽殿より御教

鳥羽殿より池上殿の御教

鳥羽殿より御教

徳親房

鳥羽殿より池上殿の御教

同九月乃ありとて八月十二日

春宮大夫公実

秋氣清りおちる年ありて此の月なればおん
あし月こころしむらあり

前右院六條

あつちあつちの月新と信龍川よりと
九月十一日あつちの月とみることと事と
こころ

源後頼朝臣

あつちあつちの月新と信龍川よりと
月とみること

皇太子肥後

月とみることあつちの月とみること

あつちあつちの月とみることあつちの月と
みることあつちの月とみること

源朝臣

あつちあつちの月とみることあつちの月と
みることあつちの月とみること

大和言師伝

あつちあつちの月とみることあつちの月と
みることあつちの月とみること

兼曆二年内裏の月とみること

春宮大夫公実

あつちあつちの月とみることあつちの月と
みることあつちの月とみること

皇太后御体

七月の御体御病御癒御祈願

徳后頼朝

光厳天皇の御病御癒御祈願

中上月

後醍醐天皇

光厳天皇の御病御癒御祈願

宇治前太政大臣実成

一宮紀伊

光厳天皇の御病御癒御祈願

秋の御病御癒御祈願

きつとある

衆議仰頼

秋の御病御癒御祈願

秋の御病御癒御祈願

後醍醐天皇

草花の御病御癒御祈願

秋の御病御癒御祈願

徳行宗朝

秋の御病御癒御祈願

八月の御病御癒御祈願

平仲季

又此の御ひりきしし出せしむるは、
宇治入道おとめ大長の子十海乃可合
口くちの御ひりきしし よかん 命みことなり

宿しゆくつそ月つきの御ひりきしし よかん 命みことなり
月つきとて命みことなり 若わか志し忠ちゆう隆りゆう

あつしまにふしきまに雲くも晴はるくさるのふはせめら月
あつしの若わか林りん院いんの可か合あひ月つきとて命みことなり

權僧正承後

つきたれはひりきのあつしきしきみふの若わかの月
若わか志し忠ちゆう隆りゆう

三葉おとわつら若わかの御ひりきしし よかん 命みことなり
大皇太后乃崩合おほみかみ月つきの御ひりきしし

大細言總信

みつとわつら若わかの御ひりきしし よかん 命みことなり
顯季けんきの御ひりきしし よかん 命みことなり
よかん 命みことなり 大宰大貳長実

くぬしあつしきし よかん 命みことなり 月つきの御ひりきしし よかん 命みことなり
源後頼朝げんごよりとも長

じつと月つきの御ひりきしし よかん 命みことなり
月つきの御ひりきしし 若わか志し忠ちゆう隆りゆう

後よりおのちの月よりあつて来し事合はれ
月照古橋よりおのちの事合はれ

三文字

こゆト今よりおのちの事合はれ
あ上月よりおのちの事合はれ

月影のすまぬせいの舟おのちの事合はれ
題一 大宰大貳長実

さめなまの舟おのちの事合はれ
永美元年船上方合よりおのちの事合はれ
おのちの事合はれ

いさよの舟おのちの事合はれ
月影接岸よりおのちの事合はれ

修理大夫顯季

松のよの舟おのちの事合はれ
いさよの舟おのちの事合はれ

おのちの事合はれ

あつておのちの事合はれ
行路曉月よりおのちの事合はれ

権僧正承俊

おのちの事合はれ
おのちの事合はれ

おもひついで月と侍らふまゝとぞあり

平家正盛

わらわの月よりあまのこゝろのこゝろ

あまのこゝろ

中紀玄成

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

平家盛朝

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

徳俊頼朝

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

平仲の女

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

あまのこゝろのこゝろのこゝろ

おはらけのあはれしはたしむるは
うらたのあはれしはたしむるは

春空のまじりて

あはれしはたしむるは

三つあはれ

あはれしはたしむるは

暁空の麻と

白布のあはれ

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

白布のあはれ

一金三十五

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

あはれしはたしむるは

白居文肥後

白居と申すは白居の山にありては毎よりその山
大曾大居文解合よりありて其の心
よあり

僧の行き

その心あり

小居と申すは白居の山にありては毎よりその山
其の心あり

大曾大居文解合

其の心ありては毎よりその山にありては毎よりその山
其の心あり

大曾大居文解合

其の心ありては毎よりその山にありては毎よりその山
其の心あり

〈金三三六〉

よあり

中納言後忠

夕暮の山より女高むのころ風は吹きて
女高むとあり

女高むとあり

白居の山より女高むのころ風は吹きて
女高むとあり

女高むとあり

白居の山より女高むのころ風は吹きて
女高むとあり

白居の山より女高むのころ風は吹きて
女高むとあり

白居の山より女高むのころ風は吹きて
女高むとあり

女高むとあり

かきまへに...
神祇伯頼仲

まがしゆ系...
鳥羽殿のお裁合いざなは高師院のうらやま

わ...
春...

わ...
かきまへに

かきまへに

かきまへに

かきまへに
かきまへに
かきまへに

平忠盛朝臣

かきまへに
かきまへに
かきまへに

かきまへに
かきまへに
かきまへに

かきまへに
かきまへに
かきまへに

かきまへに
かきまへに
かきまへに

郁芳の院寺合、一編とあり

中細言通後

いわゆる海軍の事と船政の事とをいふこと、
多岐なる事載合とあり

休理大吏頭等

五年八月、右の事、
扱政たる他家より隣家に移すこと

の事とあり、
なる事仲實相長

とあり、
美暦二年、四程の事とあり

（金三十八）

徳伸賢相長

いさゝか、
中細言通後、
いさゝか、

大納言通後

大納言通後、
大納言通後、
いさゝか、

いさゝか、
いさゝか、

香川よりの心算の音に しのびからよれ、悲し

大井河乃の心をよほしうらむる

修理大夫歌季

大井河井せぬの音乃らむせぬの歌とよからむらむら

深山の歌とよからむらむら

大細言神信

お守ふあゝ音なほきこむるわが者乃と花のよみ

とみからとよめり 神祇伯歌仲

よえんら奉乃とみらむらむらむらむらむらむらむら

大井河乃せしよふ公ら上は兼とよむ事

ゆゑに 有る忍侍家

折らるる月とくく鴨とありとの海とくく紅雲あり

落葉埋枯とくく事然とよめり

修理大夫歌季

とくくあゝのわくく吹ぶ音のよきとよみらむらむら

落葉埋枯とくく事然とよめり

大井河乃長羽長

大井河乃らとえんらむらむらむらむらむらむらむら

落葉埋枯とくく事然とよめり

大井河乃長羽長

多岐の地をゆくはついでに
九月書乃のやまより

中忍純則

わが心はついでにのれに
徳後頼朝信

徳後頼朝信

多岐の地をゆくはついでに

九月その日大井のやまより

春のあまのついで

行かぬとておれをらうらも
おれをらうらもおれをらうらも

金葉和歌集卷之第廿

冬歌

兼曆二宮前ありて殿上のあはれこそ是哉
得てあはれこそはるよあなとこわ

源氏賢朝臣

神宮前ありてまはりにあはれはるよあなとこわ
後二位有原親子家乃さうし合まをれを

よあり

源氏大友顯季

あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ
あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ

權信正承縁

あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ

源定信

あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ
あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ

あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ

あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ

あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ

あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ

あはれはるよあなとこわあはれはるよあなとこわ

徳と親

大井河とらと多る終いふやふいふとひて流
為葉とあり 大細言経信

足じらおとからしあいの菅乃小笠は掃とあり
行風似雨とつらとあり

前中納之基長

あよあなるもあ袖とつらとありいそ風
十月十日つら麻のあさとあり

法中光清

あよあなるもあ袖とつらとありいそ風

一金四十二

百首あなるもあ袖とつらとあり

徳後頼朝信

あよあなるもあ袖とつらとありいそ風
わーつらとあり

皇居文肥後

いよあなるもあ袖とつらとありいそ風
月照細代とつらとあり

大細言経信

いよあなるもあ袖とつらとありいそ風
接宿冬あとあり

あひのひくらふこころはなほしめぬしんがら あはれ

雲海子鳥いりし事よあはれ

徳直昌

阿らびく子きあはれ あはれ

神祇伯顯仲

風よこし海をたふさふあはれ あはれ

決よあはれ あはれ

きせひんくのきめを あはれ

谷水結氷こころ あはれ

酒大信

たつたつと あはれ

百首奇中 あはれ

蘇原仲實朝臣

あま あはれ

冬月よあはれ あはれ

あま あはれ

氷海池よ あはれ

大細言純信

あま あはれ

深山霧 あはれ

らたろち梅よる花もあふじくつらよまのれき
水多しうきふさくつら事とあり

大中はら長朝也

もひ雪とありぬし葉同く一のき草らひ行り
雪おた政ち片葉并合よ雪とあり

徳頼細朝也

衣あしよる風とてなつ山雪少納り
梅上初雪とつら事とあり

前河院尾張

白浪のきとらとみゆらふ海ふの梅とつら

初雪とあり 大納言細信
つら雪分たつとらふあふちつらと野のたのめ
雪中鷹持のちとつらとあり

源道敏

あましく秋あゆむつらたのきのおと打ら
鷹狩つととあり 後頼朝也

田大は家越也

あふらわちのよとあふれおのふ
百首あつらつらとあり

大蔵の臣の房

かきまゝの松ののこりて家なるおのりては
うはあつた政大は家方合よ書ののりてなり
白居文按律

うら書は松の書にては
中納言女

志らくじとて松のうら書は
大蔵令の基方使申のりてなり

おのり行儀

書は松のうら書は

書は松のうら書は 松後頼朝の

松のうら書は松のうら書は
書は松のうら書は松のうら書は
とて松のうら書は松のうら書は

六條右大臣

あつたのうら書は松のうら書は
松のうら書は松のうら書は
書は松のうら書は松のうら書は
書は松のうら書は松のうら書は

松後頼朝

神代文肥後

道よき... 遷子... 母... 殿上のみ...

藤原公房朝臣

... 源雅光

全四六

あいら... 家神... さら...

康賢王母

... 神代... 神... 少... 鳥...

全四六

中へ霜のふりては ひととちのちかき海は
池水もくまらぬ お新文の伝

徳花のうらみはよきとて じつあつては 四季のちかき
野 一斗 秋理たまの春

さしりやいそがし しのはゆら霜のよと 秋は
依花待春らんらんを

内大臣

あつた年のちかき 秋は花のよと 秋は
らんらんらんらんらんらん

蘇我成道朝臣

1484-1491 14.

念極書接く身はかじは 春はよきの立ちのり
霜月の十日ころは 接取は大臣家とて 秋の
ちかきらんらんらんらんらんらんらんらん
よとらんらんらんらんらんらんらんらん
かつらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん
ハのちかきらんらんらんらんらんらんらんらん
らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

三宮

らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

中宮長岡

年六の... 我々の...

中納言團信

あし... 侍... 朝... 月... 日... 時... 分... 秒...

四十八

金葉和歌集巻第五

賀奇

長治二年三月五日裏より竹...

の... せ...

備前院制衣

ふ... ね... せ... 河... 院... 制... 衣...

郁芳の院根合... 院乃...

六條右大臣

兼... 海... せ... 右... 法... 史... あり... 記... 事... あり... 記...

備前院... 制... 衣... 院... 乃... 院... 乃... 院... 乃...

延年と云ふ事と云ふ事

大納言後實

此の御書は其の志の元々の御事と云ふ事と云ふ事
禁中散花と云ふ事と云ふ事

中納言実

九重よりと云ふ事と云ふ事
花咲延年と云ふ事と云ふ事

徳師後朝臣

此の御書は其の志の元々の御事と云ふ事と云ふ事
持後徳朝臣家の御事と云ふ事と云ふ事

一全四九

若原園

此の御書は其の志の元々の御事と云ふ事と云ふ事
百首奇の中と云ふ事と云ふ事

徳後頼朝臣

此の御書は其の志の元々の御事と云ふ事と云ふ事
祝の御事と云ふ事と云ふ事

大納言神信

此の御書は其の志の元々の御事と云ふ事と云ふ事
後一東院の時弘徽殿御事と云ふ事と云ふ事

承成法

此の御書は其の志の元々の御事と云ふ事と云ふ事
嘉徳の御事と云ふ事と云ふ事

赤巻二箇三月馬羽殿のひき 池上苑とい
つ事とせ給ひし事

塔河院の御衣

らふ吹りたるをふたさくかんとしわくも母の衣

大嘗會の基方辰日春音者小鼓之なり

蘇志行盛

煮たふつこの光打りてあつた記代にあらせり

悠紀方の朝日のこととあり

蘇志教光朝日

黒い光の朝日とあり

巳日の樂の殿雄琴の里とあり

松尾の雄羽の里とあり

後冷泉院の御時乃大嘗會の基方御衣

園二万の事とあり

蘇志家純朝日

方とあり

月園の御衣の事とあり

高階明頼

蘇志の事とあり

祝の事とあり 皇居の御衣

所々風土の元より其の地味もよく其の地味もよく
花見遊年ころりし事とよあり

大宰大貳長實

花見の意をよき事と為し其の地味もよく其の地味もよく
桜政も大長中物とて候々りし事春日祭候
よき事とありし事因防内侍女使とて候々りし事
為防の行事辨とて候々りし事とありし事
ころり

因防内侍

花見の意をよき事と為し其の地味もよく其の地味もよく
郷——と

蘇志道純

五十五

君代はつゝ其の地味もよく其の地味もよく
宇治兼大貳大長家の前合も祝乃とあり

中細言通後

君代はつゝ其の地味もよく其の地味もよく
大長内進房

君代はつゝ其の地味もよく其の地味もよく
新院の尚とて候々りし事とあり

大長内侍

君代はつゝ其の地味もよく其の地味もよく
祝乃とありし事とありし事とありし事
源忠房

龍代より先のことにはあらず、
龍代より先のことにはあらず、

實行の家の奇合、祝のゆゑなり

蘇原為家

高祖より先のことにはあらず、

前中交ぬり、由りてせ給ひ、

のちてゆめを、六条右大臣の

うゝ、
宇治右大臣

雪原より先のことにはあらず、

六条右大臣

いさ、
龍代松の親、

金五十二

天喜四年、

奇合、祝のゆゑ

後冷泉院、

あつ、
龍代

松上雪、
源頼家朝臣

美代のた、

前河文、

れ、
祝の、

祝の、

源後頼朝臣

く、

一巻五十三

金葉和歌集卷第六

別離歌

急房朝臣丹後守よとてわをさるよは

らとまら 大納言経長

ききしやわの文のたをそとてなほよとて

ぬき 若原忠基房朝臣

よそはくあはれよとておのりふと名とてあつ

あやふらとゆよとてあつてふとわはらよとて

のこまじやあつわとてあつてあつ

堀河右大臣

ふくまの後の別荘の事
起——
後人

とある我のいふ事

細捕の事

とある道の上東の院

の事

かきまの神子

とある

上東の院

別荘の事

金五十四

源公定 大隅守
あやめ

源為成

とある接の事
對馬守

とある

とある

赤藤

い新乃海よりあふえより果て敷をのりぬる魚
源行宗朝也

侍以宗し我母よりせうくくを頼とくか者よ
百首并の中よ別の心よあり

中細言通信

宗よ心よまよらるとし便わにたもたよ
藤原基俊

秋より立別ぬる君とわんぬ思よ
掃為仲朝長よらのくあふらり
じよのふじやあはらもせらよの思ふ

藤原宗朝也

今よ心よまよらるとし便わにたもたよ
若ああわらら

無よ心よの今よまよらるとし便わにたもたよ
細平にいくとてはくくくを隊とてはく
しやあ

中細言通信

きやうの朝のよ名と思ひを帯けり
春空よまよら

あま目よの打よしよよはのれも
心ららるるあはらわららよの言らわ

あはれおのゝこころ

橘則光朝臣

我いりてきこむるもいりて来らるよほの物さる

ゆらにかり

金葉和歌集巻第七

戀奇上

あはれおのゝこころ

小一條院御製

あはれおのゝこころ

あはれおのゝこころ

あはれおのゝこころ

神祇伯顯仲

あはれおのゝこころ

あはれおのゝこころ

春之末大実

花のつぼみと草花のつぼみとをいふ

後朝のつぼみとていふ

つぼみとていふのつぼみとていふ

花のつぼみとていふ

よめ

花のつぼみとていふ

花のつぼみとていふ

花のつぼみとていふ

源雅光

花のつぼみとていふ

後二位后母親子実乃雙紙合子実乃

いふ

宣徳法印

海軍のつぼみとていふ

大宰大貳長実

花のつぼみとていふ

花のつぼみとていふ

よめ

津守圃基

花のつぼみとていふ

花のつぼみとていふ

よめ

花のつぼみとていふ

あませじよものじりるあんと夜遊がよ事なまをうま

中細云雅定

わき事らひあはたのく海平馬渡のまのしむとの歌

わら文ううよ行わうう人のあしと文をう

何や一の小家よえ抱して後日ころわわう

ほろりうる 春文なまの實

あひのりあはれそのれま道行わううわわあ

願季つ家より寄織女恋こつまうら

うらう 少将の教母

たまご文まじれあはれしやわなまうらあはれ

あま鳥恋こつる事なまをう

徳柳後朝長

あまのりあはれそのれま道行わううわわあ

あま鳥恋こつる事なまをう

た兵場清實能

あまのりあはれそのれま道行わううわわあ

あま鳥恋こつる事なまをう

あまのりあはれそのれま道行わううわわあ

あま鳥恋こつる事なまをう

あま鳥恋こつる事なまをう

あふまはるのじまにえれあわやしむるまを
思無乃らとよま 中細言実行

海乃りま察まうつとね下よまるといふ
月お慈こころの事よとよめり

藤の基元

あふまはるまのいひまよるまの
思まの

はらとよらあそあはらふしと
もの申けら人のあ申文の
くわと慈まのりあわらるる

らー字あり 若原初房朝臣

西朝すあふまよるまの
まうら事あてらうら
らわらひ思わはらるる

あふまの

あふまのあふまのあふまの
文うわよこせらうら
らふらうらま

あふまのあふまのあふまの
実行のあふまのあふまの

長安の母

あまのついでにのほひを橋のふもとにわたりて命を断つる

おゑ道徳

無常をよみて袖のふたに海の川を并せよとてん

おのろ教母

あはれなる若むそをよむ海に命をよむとてよとてわたり

題目お

皇太后右大臣の依

海川袖の并せよとてんてんてんてんてんてんてん

徳顯國經信

あまのついでにのほひを橋のふもとにわたりて命を断つる

あまのついでにのほひを橋のふもとにわたりて

おゑ歌捕朝信

無常をよみて袖のふたに海の川を并せよとてん

おのろ教母

あはれなる若むそをよむ海に命をよむとてよとてわたり

後朝のよとてん 徳行宗朝信

あまのついでにのほひを橋のふもとにわたりて命を断つる

諸の院のよとてん 艶書合よとてん

春のよとてん

あまのついでにのほひを橋のふもとにわたりて命を断つる

こころのまよひ 老恩歌精記の

身前にもまよひあり我の心もまよひあり我の心もまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

よるん 今つら

らまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

院乃くあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

徳信朝臣

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

あつちまよひありあつちまよひありあつちまよひありあつちまよひあり

何事もなから

相換

あめあしあつぬ海もよみりもかありのりのあつぬ
同五月はらうきしんせうひるはる
あつぬいふしんせうあつぬいふしん

橘季通

あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ

神祇伯元仲

あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ

あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ

あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ

若原忠雄

あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ

藤原正家

あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ
あつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬあつぬ

あつたはらけきつらひのつらき
事のおもひもたしむつらき

若菜の教母

あつたはらけきつらひのつらき
長實の葉の芽今も花はつらき

若菜の教母

あつたはらけきつらひのつらき
春の空をよみ

白菊のつらきつらひのつらき
あつたはらけきつらひのつらき

若菜の教母

あつたはらけきつらひのつらき
あつたはらけきつらひのつらき

若菜の教母

あつたはらけきつらひのつらき
あつたはらけきつらひのつらき

若菜の教母

あつたはらけきつらひのつらき
あつたはらけきつらひのつらき

皇居文武部

あひかへしうけつていふこといふにむかひあひかへし

徳後頼朝片

いひかへし無きこといふにむかひあひかへし

無きこといふにむかひあひかへし

接政なる片

あひかへし無きこといふにむかひあひかへし

あひかへし無きこといふにむかひあひかへし

白河崇徳中

あひかへし無きこといふにむかひあひかへし

律師実徳

あひかへし無きこといふにむかひあひかへし

皇居文義農

あひかへし無きこといふにむかひあひかへし

接政なる片

あひかへし無きこといふにむかひあひかへし

塔河院流河艶書合ふらり

白首文肥後

思ひもよき日とあつ青月ぬき掛りこころいを袖の流しを
白首文とて人々戀慕あはれぬつらきに
書出さるるを 羨濃

ふゆふゆのふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆ
ゆふふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆ
ゆふふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆ
ゆふふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆ
ゆふふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆ
ゆふふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆ

梅政たむ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

よらんふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

三文字大進

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

梅政たむ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

梅政たむ

我のいふ事もつらきものなりけり
折られたる家より恋乃きつる事あり

源雅光

あつちの事もつらきものなりけり
事なき事なき事あり

大中長公長朝臣

こゝろもつらきものなりけり
はまもつらきものなりけり
なつてはつらきものなりけり
こゝろもつらきものなりけり

藤原公教

折られたる家より恋乃きつる事あり

源雅光

あつちの事もつらきものなりけり
権中納言後長公長朝臣
よえらふ事もつらきものなりけり

源俊賴朝臣

あつちの事もつらきものなりけり
あつちの事もつらきものなりけり

春の女主人

あつちの事もつらきものなりけり

重服よりちりり今立あつて海へ出た
ゆゑにけしきうなる

播磨宗女

きつてつらうなる衣ぬきけり命をたじ
慈乃らとくうらむらん

藤中の上総 井官

石の籠のまよひもさるるつら
身名を別當

たのむにんじんあはれなる
あつた

金葉和歌集卷第八

意奇下

初めら無れはく海波よはら

良暹法師

あすもつちのあはれもよとくまのたかき海を流るる
いほの家よとて紅紫海橋立の雲と三乃冠と
かよふもせむらひもよとくまのたかき
あはれもよとくまのたかき
あはれもよとくまのたかき

若原範永朝臣

後朝意乃のよとくま

徳師後朝臣

あはれもよとくまのたかき
月増無こころの事とよあら

田大信

あはれもよとくまのたかき
あはれもよとくまのたかき
あはれもよとくまのたかき
鳥羽殿の奇念よとくまのたかき
あはれもよとくまのたかき

若原仲實朝臣

高きとに袖乃きわめ我のしるしに由り破よするの由
暇入意とらつる事とよまら

中納言雅之

り事とにお思はり以附は今のいともいひし

悉乃らとよまら 右兵衛尉経信通

此并ねるもらも親れしあまも其公威よりか

曾居えよん人々この言はすらめは

よまら

大宰大貳長実

おらの世しあまわらふのうらうらあはら松徳

悉のよとよまら

曾居文權本師時

今もあまも此世に今迄もわらぬまはるあ
あまら人々百首あまらんるも根のら説
よまら

権僧正承俊

曾んえなるのいひあはらすなるもあまら
悉乃あまのあまら 隆徳法師

今もあまも此世に今迄もわらぬまはるあ
苑今更時よららよまあまらとよまら
い

前中納言越後

人あまの世しあまわらふのうらうらあはら
後乃の更とて悉乃あま十首人々のいひ

あふかたにさくらさくらとよみ

修撰大夫歌子

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

都芳門院根合の歌のうらとよみ

内防内侍

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

金

お 新美海内

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

大宰大貳長実

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

中書上総

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

徳信頼朝臣

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

あふかたにさくらさくらとよみの花の袖のぬけ

海にわたりて下たしむるにまはるるにわたりて
道に遇ふとあり たるは清浄實徳

思ひてあはれおのれに後につくはるるに
人となりみまはれは心ち例をよおしけ
れはあら

わりのもなるとんく思ひ出よ我も余絶以
其ありつらまら 若も永實

そらまはつらまらあはれ無とたあはれ
歌詩余初無談 中納言團信

多とあはれつらまらあはれ無とたあはれ

巻一六

かえり今す

わ事多つらまらあはれ無とたあはれ

大納言經信

若くはの障あつらまらあはれ無とたあはれ

若も永實

あはれ無とたあはれ無とたあはれ無とたあはれ

揚後宗女

あはれ無とたあはれ無とたあはれ無とたあはれ

る
くつらき

前新院肥後

若くはわづらひ書きたる人の書きたる
葉のいよなり

た其場録實録

且この書はわづらひの多しそふたふたの書

とらふはし部をよめりし事

わづらひの書は後よりいふ事あり

書つて置てある 春の末大まか

敷くはわづらひの書はわづらひの書

を其のいふ事と 若くは成道朝臣

其のいふ事とわづらひの書はわづらひの書

多聞のいふ事とわづらひの書はわづらひの書
とらふはし部をよめりし事

権備正永後

あるはわづらひの書はわづらひの書

若くはわづらひの書はわづらひの書

わづらひの書はわづらひの書はわづらひの書

感徳母

わづらひの書はわづらひの書はわづらひの書

接収た大臣家より葉のいふ事あり

徳雅文

お

侍があらぬ

たふさふさい御のきよらうしんあしりからぬひのあはれ

母兼からぬあはれ 徳親房

物よえきののりからぬあはれのともよのこのりからぬあはれ

物やむじむあはれららるる月乃あはれむせらぬ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれ 攝後宗女

はつたけのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれ 上総侍

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

とらけのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれ 徳後法師

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれ 民部卿

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

大納言御信

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

わらふよく母房のあつみうらんを打つて
なせぬしあう 敬忠殿細朝臣
念仏のあつみうらんを母神あつみうらんを
坊河院沖時懸書合りしあう

中納言後から

念れぬあつみうらんの浦風あつみうらんの海
か—— 小文紀作

あつみうらんあつみうらんのあつみうらん
あつみうらんあつみうらんのあつみうらん
あつみうらんあつみうらんのあつみうらん

梅の家持

あつみうらんあつみうらんのあつみうらん
あつみうらんあつみうらんのあつみうらん
あつみうらんあつみうらんのあつみうらん

團信のあつみうらんのあつみうらんのあつみうらん

徳重

あつみうらんあつみうらんのあつみうらん
あつみうらんあつみうらんのあつみうらん
あつみうらんあつみうらんのあつみうらん

出羽辨

よきことしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

き

大和言納信

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

よきことしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

前河院六條

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

よきことしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

よきことしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

源後頼朝片

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

あつしむるはあまのついでにあらはれしはあまのついでに

かゝるにあらばこの御事...
なほ御事なりと
あしきことなる御事...
くさくさ...
また...
身居文あり

旅宿恋とら...
御理太夫御事

あつた...
御事

くさくさ...
文紀傳

あつた...
なほ御事なり

あつた...
御事

あつた...
御信宗御事

あふる者いひしりく事とよあり

たふたまは徳也

ふまむかひの徳の徳もあふるぬ徳あふる徳あふる
くくくくくくくく 大中は補死也

わらぬいひらぬさうりさわいし徳とて徳と
三井寺よくくく 徳なりんぬんくくく

僧教の圖

いひしりくくくくく我の徳を徳とて徳
いひしりくくくくくくくくくくくく
いひしりくくくくくくくくくくくく

とていひしりくくく ぬんくくく

むくくくくくくくくくくくくくくくく

たふたまは徳也

いひしりくくくくくくくくくくくく

ぬんくくく ぬんくくく

わまむかひの徳の徳もあふるぬ徳あふる徳あふる
くくくくくくくくくくくくくくくく
いひの徳の徳もあふるぬ徳あふる徳あふる
いひの徳の徳もあふるぬ徳あふる徳あふる
いひの徳の徳もあふるぬ徳あふる徳あふる

見ぬのし野のほろつわさつら春をいそがせし
こゝろのしづかきよきよきよきよきよきよきよ
わさよきよきよきよきよきよきよきよきよ
うきよきよきよきよきよきよきよきよきよ
わさよきよきよきよきよきよきよきよきよ
あきよきよきよきよきよきよきよきよきよ
をいよきよきよきよきよきよきよきよきよ
逢ふよきよきよきよきよきよきよきよきよ
わさよきよきよきよきよきよきよきよきよ

春の海は花の香をいそがせし
あきよきよきよきよきよきよきよきよきよ
あきよきよきよきよきよきよきよきよきよ

前河院六條

あきよきよきよきよきよきよきよきよきよ
あきよきよきよきよきよきよきよきよきよ

源雅光

あきよきよきよきよきよきよきよきよきよ
あきよきよきよきよきよきよきよきよきよ

よあし

後醍醐天皇御歌

御歌を御覧しつゝあはれなきに
あはれなきにあはれなきに
あはれなきにあはれなきに

あはれなきにあはれなきに
あはれなきにあはれなきに
あはれなきにあはれなきに

あはれなきにあはれなきに
あはれなきにあはれなきに
あはれなきにあはれなきに

あはれなきにあはれなきに
あはれなきにあはれなきに
あはれなきにあはれなきに

よあし

源歌國朝歌

我が心は山に雲の如く
我が心は山に雲の如く
我が心は山に雲の如く

我が心は山に雲の如く
我が心は山に雲の如く
我が心は山に雲の如く

源後頼朝歌

我が心は山に雲の如く
我が心は山に雲の如く
我が心は山に雲の如く

源行宗朝歌

我が心は山に雲の如く
我が心は山に雲の如く
我が心は山に雲の如く

源後頼朝伝

わがもろくはるまはたしひのいひ
あはれ

金葉和歌集巻第九

雑部上

じう道方まてはくよはのつあま
よらりて見ゆわらるみまわのじめの我程
よらりて見ゆま乃出さしおのいふゆ
花の志まよまらてあまのいふゆ
よらり

大納言御信

神垣のじうわら梅の花よまらまわ
山家鶴のつる事とんよまらせゆ
ひ

持政の大臣

此より記の中より、聖徳太子の母の宮中より、
園宗寺乃花と云流り、後ニ東院四事
ありたり、そのこと、世もつりたり

三又

花と云君と云記より、年下り花、我がものらり、
花見四事と云く、妹の内侍の事と云ふ。
うらうら

権僧正永後

心素乃い、かきと云、今つと、世もつりたり
也—— 内侍

つとせと云、いふ、いふありあり、花の事と云

大率より、世のいふ、今つと、花の事と云
つとと云、いふあり、僧正行き

花と云、いふ、いふあり、
塔河院、いふ、いふあり、
花と云、いふ、いふあり、
花と云、いふ、いふあり、
花と云、いふ、いふあり、

徳行宗朝也

いふ、世もつりたり、
いふ、世もつりたり、
いふ、世もつりたり、

よめる

徳定信

みまへ吉野の女梅をわらわぬまの首に押木
後三条院の女梅をわらわぬまの首に押木
の春さうわなつ花をわらわぬまの首に押木

右を將曹素道方

こえりおのむらうの女梅をわらわぬまの首に押木
はつらひのこらふらうの女梅をわらわぬまの首に押木
んすのこらふらうの女梅をわらわぬまの首に押木

藤原朝仲朝長

身はれまよしの女梅をわらわぬまの首に押木

花命かりて修時条の陪境一竹をわらわぬまの
右中女梅をわらわぬまの首に押木

右を推信朝長

吹上梅をわらわぬまの首に押木
階室つ大宰佛よしの女梅をわらわぬまの首に押木
番推州社よしの女梅をわらわぬまの首に押木
りし松のこまをわらわぬまの首に押木
らうよめる
神皇大膳武忠

よわらわぬまの女梅をわらわぬまの首に押木
徳心をわらわぬまの女梅をわらわぬまの首に押木

きりやむらさきあけぬるあけよきあけよきあけよき
いよあけ

良暹法師

あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき
あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき
あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき

藤原実定

あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき
あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき
あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき
あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき

徳后頼朝

あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき

田安寺

中納言基長

あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき
あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき
あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき

三交

あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき
あけよきあけよきあけよきあけよきあけよきあけよき

信正行幸

草乃のふと何處かありと申すいふじとぬきや袖端に
良暹法師よとじり事ありとるるにわじり
し百もあつていふとてふとてふとてふとてふとてふと
はらまら

律師慶範

春のうらみの白ついでにふれいとふれいとふれいと
對出待月といふ事とあらる

おゑのふゆ

いふよのいふよのいふよのいふよのいふよのいふよの
おゑのふゆのいふよのいふよのいふよのいふよのいふよの

信正行幸

春のうらみの白ついでにふれいとふれいとふれいと
おゑのふゆのいふよのいふよのいふよのいふよのいふよの

平康貞女

いふよのいふよのいふよのいふよのいふよのいふよの
おゑのふゆのいふよのいふよのいふよのいふよのいふよの
いふよのいふよのいふよのいふよのいふよのいふよの

源師光

いふよのいふよのいふよのいふよのいふよのいふよの
おゑのふゆのいふよのいふよのいふよのいふよのいふよの

傳部賴基之御
うらやま

傳部賴基

長久寺の御
郁芳の院行現
よきちから
うらやま

仲正女曾の御
うらやま

うらやま
うらやま

振津

琴乃重^{のあ}の御
うらやま

うらやま
うらやま
内大臣家越後

御乃重の御

前所文作珠のまじりて
うらまじりたるの宿の井
うらまじりたるの宿の井
返らざる事あり申す
うらまじりたるの宿の井

前所文回付

如きことなきを記す
和泉武部保昌より丹後
丹後へ書きたる書
丹後へ書きたる書
丹後へ書きたる書
丹後へ書きたる書

丹後へ書きたる書
丹後へ書きたる書
丹後へ書きたる書
丹後へ書きたる書
丹後へ書きたる書

武部回付

大島野井道の書き
百首方の中より

修理大工歌集

うたはれはるる
百首方の中より

泰議師頼

此の集撰一も時分こられてとくさく
よめり
荻原歌捕頭長

安閑吹ぬものこころはわらふまのほらこころ
あゆむあこしあふのこころこころあつら
よめるこころもこころのほらこころこころこころ
こころのほらこころ

平康貞女

こころのほらこころのほらこころのほらこころ

こころ

こころ

和泉式部石山よみつらあはるま津
とほりあはるまよみこころのあはる
あはるこころあはるのあはるあはるあはる
のあはるのあはるあはるあはるあはる
あはるこころあはる
和泉式部

こころのあはるあはるこころのあはるあはる
あはるあはるあはるあはるあはるあはる
あはるあはるあはるあはるあはるあはる
あはるあはるあはるあはるあはるあはる
あはるあはるあはるあはるあはるあはる

あはれなる御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて

若菜時房

あはれなる御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて

春之末末公家

あはれなる御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて

相換

あはれなる御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて

堀河院の御歌

あはれなる御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて
おのれを御心にて

水車とみへる 備前川

いづれかみへる水車我らなまのりて
まじりて水車ありてまじりて上東
門院は村子ありてまじりてまじりて
まじり

備前右大臣

いづれかみへる水車我らなまのりて
まじり

上東門院

いづれかみへる水車我らなまのりて
まじり
備前行きまじりてまじりてまじりて
ゆりまじりて備前とまじりてまじりて

よきよき 大納言宗通

草花のいづれかみへる水車我らなまのりて
まじり
おまじりてまじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりてまじりて

横井尾

いづれかみへる水車我らなまのりて
まじり
備前集院のいづれかみへる水車我らなまのりて
まじり
まじりてまじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりてまじりて

あなをいづくまはるる人よ不せんわが
世もあつらん流るるまづれら

か将内侍

あひまへはあつりうとまはれ極くはくは魚ん
甲斐國のわたりてあつるのりよあわ
らあつるのりあつるのりあつるのりあつる
よつるのりあつるのりあつるのりあつる

よみかへりあ

鳥の子のよつるのりあつるのりあつるのりあつる
百首あつるのりあつるのりあつるのりあつる

修理大夫歌子

朝のあつるのりあつるのりあつるのりあつる
歌一あ

なむ仲實朝臣

あつるのりあつるのりあつるのりあつるのりあつる
あつるのりあつるのりあつるのりあつるのりあつる
あつるのりあつるのりあつるのりあつるのりあつる

徳行宗朝臣

あつるのりあつるのりあつるのりあつるのりあつる
あつるのりあつるのりあつるのりあつるのりあつる

平忠盛朝臣

あつるのりあつるのりあつるのりあつるのりあつる
あつるのりあつるのりあつるのりあつるのりあつる

自然のあはれを三つとて、我々の心をなすべし

徳光總母

一 徳光の心

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳光の心は、我々の心をなすべし

徳信のよきことばにゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
盛房野殿のよきことばにゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
ふたりのよきことばにゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
ふたりのよきことばにゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ

徳信頼朝片

あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
大業の神徳にゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
ふたりのよきことばにゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ
ふたりのよきことばにゆきよゆきよゆきよゆきよゆきよ

僧正行基

あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ

あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ

あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ

前中納言

あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ
あはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよあはれよ

申せらるる御返事

藤原實光御信

申上り候御返事

御返事

藤原實光御信

申上り候御返事

御返事

御返事

藤原實光御信

申上り候御返事

申上り候御返事

御返事

藤原實光御信

申上り候御返事

御返事

御返事

藤原實光御信

申上り候御返事

御返事

申上り候御返事

皇居文美濃

上陽ノ昔敵多ク思昔老亦昔ニシテハ
徳雅光

青袋書周ノ細長ニシテハ
徳後頼朝信

...

...

傳行記

...

草花ののびにまじりてすむのよしをいふ歌にあらむ
六条大夫六条乃家はくわつてついでにあらむ
ゆきとくしとわつてついでにあらむ

頭雅二母

中身まうらぶし集の底にのこ歌あつてなむのしほ
宇治平尊院はまにあらむ宇治よみ見しきい
えのたしむらひのついでにあらむ

忠使法師

うらたつそのえんじまあつたをうらたつて
愛とくしとわつてついでにあらむ

ゆりあつ

因防の伝

恒のて我を軒乃あふ家志のまじりてついでにあらむ
賀茂成助よおつてついでにあらむ
ゆきとくしとわつてついでにあらむ

津守圃基

きつてついでにあらむ

賀茂成助

ゆきとくしとわつてついでにあらむ
賀茂成助よおつてついでにあらむ
ゆきとくしとわつてついでにあらむ

おのれをいかにしむるに
おのれをいかにしむるに
おのれをいかにしむるに

曾志の歌大氣

石の足あわせらるる君より
大急行蓮聖人より
よめる

天台座主仁覺

おのれをいかにしむるに
百首の方の中を述懐のつよめる

徳后頼朝臣

世の中をいかにしむるに
おのれをいかにしむるに
おのれをいかにしむるに

よめる歌

おのれをいかにしむるに
おのれをいかにしむるに
おのれをいかにしむるに

赤穂頼

くわんせいのりていひていふにきくはるすけのしん
まへにていふにきくはるすけのしん

徳師賢朝臣

かあひのりていひていふにきくはるすけのしん
前右政大臣の妻よゆめより女と申す志宗
朝臣と申す朝臣と申すはるすけのしん
志宗よあひよきあひのしんていひていふに
かあひのりていひていふにきくはるすけのしん

徳朝臣朝臣

くわんせいのりていひていふにきくはるすけのしん

花人親隆のりていひていふにきくはるすけのしん

若原公教 敏一

雲の上よまふゆめとあひのりていひていふにきくはるすけのしん
堀河院沖時徳後重武部連りきくはるすけのしん
よまふゆめとあひのりていひていふにきくはるすけのしん

徳後頼朝臣

目つひのりていひていふにきくはるすけのしん
是れはなまふゆめとあひのりていひていふにきくはるすけのしん
よまふゆめとあひのりていひていふにきくはるすけのしん
はるすけのしん

因防内侍

あめりや春のわらふまじき晴くさむらじの
さあけらなりよるるとき 若きみん

金葉和歌集巻第十

雑部下

こゝろのうらむらりてのうらみの葉よかりこ
もらよ梅花さくわのさむらむらむら枝よじ
つゝまむらむらむら

若原基後

ひらりあるふらぬ梅うえの花よ我もわらむ

中納言若原

梅うら花のさくものひらりあるふらぬ
ふらむらむらむらむら花見わらむらむらむら

月おこりありあけあけきるよらうてた見
くらふありしうあふ事ようあてあてあり
なれらうらうら **平基徳**

橋ゆきいし風のきりきり花りなはらあり
後三條院うたれあうまうて後八月
お家の内帳はあめをりあきらまうの
花のさねありあきらまう

若忠有祐朝臣

あやめあはれこのうらこのあやめあはれ
あやめあはれこのうらこのあやめあはれ

よてあはれ

六條右大臣

新治のあはれこのうらこのあやめあはれ
郁芳の院うたれあうまうて後八月
あはれこのうらこのあやめあはれ

康徳皇太后

うかりあはれこのうらこのあやめあはれ
あはれこのうらこのあやめあはれ

敦原元法

あはれこのうらこのあやめあはれ
下福うたれあうまうて後八月

徳后頼朝長

これ行乃うと云いぬる病の力いふまのいふまは
範永朝に出来ぬよきとて能く守り
くつああるころくつあわりのけうもま

菅原通宗朝臣

よきぬとよきと云いぬる病の力いふまのいふまは
律師長俊くわくつら母のそ乃わつてい哉
してわらあるよ乃多まみもるま
あつら乃款と云いぬる我がやの下のいふまは
歌仲の女子よきと云いぬるあまのわらわ
わらわぬと云いぬるあまのわらわ

大鏡御通房

う乃多まみと云いぬるあまのわらわ
後三位者原賢子まじあわらわ
けいふと云いぬるあまのわらわ
してわらわぬと云いぬる

菅原賢子

いふまは月よの...と云いぬるあまのわらわ
かぬわつてのらう...と云いぬるあまのわらわ
と云いぬる

権備正永海

あまのわらわぬと云いぬるあまのわらわ

くはしむるはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき

和泉武部

あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき

和泉武部

あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき

平忠盛朝臣

あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき

和泉武部

あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき
あはれはむらさき

和泉武部

草まよへ思ひもよよ海らにまきん家の夜にんわ
る層期に重服くまわくこもりわく後り
まらよ出羽舞のこもわんくひもわんくわん
をわんくまきんくわん

橋元任

あつらひのまきんくわんわんわんわんわんわん
範圍期にんくわんわんわんわんわんわん
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん

わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん

徳田清神

天の萬代のまきんくわんわんわんわんわんわん
神感わんわんわんわんわんわんわんわんわん
集まきんわんわん

抄政た大臣

心神信養くわんわんわんわんわんわんわんわん
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん
法文のわんわんわんわんわんわんわんわんわん
わんわんわんわんわんわんわんわんわんわん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

三交

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

徳行宗朝信

あまのりやうのてんてんてんてんてん

實範聖人山寺よこもわあまのりやう

あまのりやう

新藤法師

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

あまのりやうのてんてんてんてんてん

白居文肥後

あまのりやうのてんてんてんてんてん

清海上人法生と云ふを思て孫ありけり
まろは枕をえし僧乃まろのみまろを
かいらわらそ嵐の吹とまろはわらわら
普賢十願の文に我に欲余終時と云
まろと云ふ
貴樹法師
まろと云ふはまろをたふすまろは清じまろ
高罪如霜露と云ふ文と云ふ

覺譽法師

鳥と云ふはまろの清じまろと云ふ
弟と云ふはまろと云ふ 僧正靜因

金百二

吹草と云ふはまろの清じまろと云ふ
提婆と云ふはまろと云ふ 瞻西上人
まろはまろの清じまろと云ふ
身居と云ふはまろと云ふ
まろと云ふはまろの清じまろと云ふ
龍女と云ふはまろと云ふ 勝起法師
まろと云ふはまろの清じまろと云ふ
涌出と云ふはまろと云ふ 權僧正承俊
まろと云ふはまろの清じまろと云ふ
不輕と云ふはまろと云ふ 覺雅法師

わりの法とひかりの法とを打ち合ふと道にさか
薬王の法とある懐徳法師

くろくしめてゆくも一もくろくしめてゆくも
記のあやと読まらば繫寶珠のよのたつと
いふまにゆくもさかるといふまにゆくも
権徳の法後

常任の月輪とある
懐徳法師

常任の月輪とある
懐徳法師

常任の月輪とある
懐徳法師

常任の月輪とある
懐徳法師

きふにわがこころせまりはらの為らぬ花をよき世の
地獄の繪と鉢乃らるるよりのつらぬるを
みくよあら
和泉式部

おもしろくはらぬ花をよき世の
くろくよあらるるよりのつらぬるを
あじくよあらるるよりのつらぬるを
らくよあらるるよりのつらぬるを
都のよあらるるよりのつらぬるを

田原始

草乃らるるよりのつらぬるを

あじくよあらるるよりのつらぬるを
障子乃らるるよりのつらぬるを
舟のよあらるるよりのつらぬるを
のよあらるるよりのつらぬるを

源後頼朝伝

あじくよあらるるよりのつらぬるを
傳

あじくよあらるるよりのつらぬるを

永成法師

おはまひのりふりまきいよきいあされ

律師慶範

みら乃くまらわたりよわあらん

とこの花をそ 頼經法師

とこのいも乃花うさたよあれ

公智貞朝臣

梅は乃じ免きらわやあらん

賀茂の神社まてあつくとももの志あふあわ

神主成助

六

あめりうらよき孫のよとくうまを

行重

いふから神の所くまらあらん

宇治あて田の中よ老ゆら男のうとあま

とんあ

信正源覺

春の田よまら入ぬふあおこまう孫

宇治入道前大臣大信

かろあはらよあはらわ

日の入くまら 觀置法師

日乃つららねあけを似てあま

平為茂

わんごふかしのしるあつこの時

田平の馬のあつらふとみあ

永源法師

田平のしるあつらふとみあ

永成法師

みくらりのあつらふとみあ

おつらふとみあ

かみらの板のあつらふとみあ

助成

はらけのあつらふとみあ

あつらふとみあ

しるあつらふとみあ

園忠

梅のあつらふとみあ

さかしのあつらふとみあ

まきのあつらふとみあ

よしのあつらふとみあ

頼朝朝臣

かみらのあつらふとみあ

信總

卯のら海と行くとありの

わのさかん

續人石名

あふらちゆらよあゆとつらん

匠房の妹

うみよとりつれしものなぶ川ふ

和泉武部のあまはつゆさるよはらふ

うわとくつれあふとよのんてつら

とかん

神皇恩頼

ふらゆらうとあよまのんてつら

和泉武部

源頼光の社とつら

源頼光の但馬守あまのつらつら

のあまはつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつら

源頼光朝臣

たつらあつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつら

相換母

あまのこころのこころのこころのこころ

漢のあま

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

律師慶暹

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あまのこころのこころのこころのこころ

あつらひのしるしをよみて

頼善法師

あつらひのしるしをよみて

源光

あつらひのしるしをよみて

あつらひのしるしをよみて

源光

あつらひのしるしをよみて

あつらひのしるしをよみて

頼善法師

あつらひのしるしをよみて

観蓮

あつらひのしるしをよみて

あつらひのしるしをよみて

あつらひのしるしをよみて

源後頼朝

あつらひのしるしをよみて

源光

